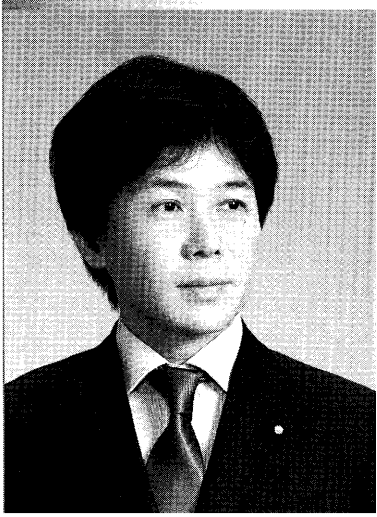


日本敗れず。そして日本主義へ

前衆議院議員・医師 今村洋史



「アメリカが世界」であり、日本は喪われた

「右を向いても左を見ても、莫迦と阿呆の絡み合い。どこに男の夢がある」と鶴田浩二が「傷だらけの人生」で歌っています。今の国会を眺めてみて歌詞通りの有り様と思わざるを得ません。しかし、その莫迦と阿呆を選んだ国民も同様に莫迦と阿呆なのではいでしょうか。

我々が莫迦と阿呆ばかりになったのは、結局、敗戦後の日本が、新憲法、講和条約、安全保障条約によって「アメリカが世界である」ことを強いられた、戦後七十年の間に我々国民自身が帰属すべき「祖国・日本」を喪ってしまったことにあると思います。

「アメリカが世界である」ことを最も忠実に実践したのが小泉政権、菅政権、野田政権でした。小泉政権は自民政権でしたが「自民党をぶっ壊す」と宣言して政権

奪取しただけあり、非・自民的政権でした。小泉政権が実行したのがアメリカの為の新自由主義的政策でした。小泉は国富を流出させる代わりに政権の維持をアメリカから保障されたのです。この政権が長期政権となったためにアメリカの強制に抗う政治家は駆逐され、日本の政治は大きく毀損し、変質したのです。

日本にはアングロサクソン・アメリカのペリー提督の砲艦外交に始まる欧米列強からの圧力を撥ね退け、日本の独立を守ろうとした人々がいました。大東亜戦争に敗れたとはいえ、戦後もその系譜に連なる日本の保守と解すべき人々がいました。

保守の再定義を試みた「日本の保守」は敗れた

自民党を離脱した日本の保守の代表格に亀井静香氏、

平沼赳夫氏らがいました。

亀井氏は、新党「国民新党」を率いて民主党政権に参画し、悪法三法と呼ばれた「外国人参政権」「人権擁護」「男女別姓」の成立を阻止し、また「郵政改革法案」により小泉政権の「郵政法案」を引継ぎました。

平沼氏は、従米かつ特重に媚びる民主党政権に危機感を持った人々を集結し、「たちあがれ日本」を結党しました。それは日本的保守と従米保守らとの峻別を明らかにする、保守の再定義を試みるものでした。

しかし、後に「国民新党」は党内クーデターにより亀井氏を放逐し、挙句「国民新党」は自壊しました。亀井氏は二度の総選挙を無所属で戦い抜き、新たな政治集団の結集を試みている状況です。「たちあがれ日本」は「太陽の党」「日本維新の会」「次世代の党」と変遷しながら、先日の平沼氏、園田博之氏、両氏の自民党復党によって事実上幕を閉じました。

何故、「国民新党」「たちあがれ日本」両党の日本的保守による保守の再定義は失敗したのでしょうか。

民主主義において「数は力」であることは事実ですが、両党ともに始まりは日本的保守でありながら、その「数は力」であることを目指したために、従米・媚中保守を、それと認識しないまま取り込んでしまったことに敗因が

あるのだと思います。

「国民新党」は、従米・媚特重の当時の与党民主党との連立に留まりたい日和見な従米保守連中によって自壊しました。「たちあがれ日本」は日本の保守へ這入り込んだ従米保守の選別を行わないまま選挙に臨み、従米保守・新自由主義の旗手というべき「日本維新の会」と合流したのです。

平沼氏が真の保守の結集を望み、分党した「次世代の党」においても従米保守との峻別は不可能でした。「次世代の党」の主張において日本の保守の主張と従米保守の新自由主義的主張は全く相容れず、選挙公約が整合性を欠くものになったのも必然でした。「次世代の党」の敗退の最も大きな要因は、その整合性のない公約にあったのです。保守の再定義の試みが失敗に終わったのは、この従米保守の峻別に徹しきれなかった点にあるのです。

生物は生来保守的である

従米保守が「保守」という主義を論ずるとき、よく引き合いに出すのがエドモンド・パークです。パーク自身は「保守」を体系的な主義としても整理していなかった（出来なかつた）ことが、その「保守」の本質を表してはいないのでしょうか。また、パークと共に語られるのが

経済学者のハイエクです。ハイエクは道徳、慣習といった「自生的」なルールを重視しています。

従米保守は、それを保守主義、自由主義と捉えますが、国家が一切干渉しない経済的自由と政治的自由を同一視し、「自由社会においてルールは自生し進化するはず」と主張する極端な自由主義を掲げるハイエクは紛れもなく「保守」ではなく個人主義・新自由主義者です。事実、ハイエクも自身を「保守主義者ではない」と述べています。1980年代、アングロサクソンのイギリス、アメリカにおいては、サッチャリズム、レーガノミクスと後に呼ばれるハイエク的政策を実行しました。その新自由主義的な政策は世界的にも広まり、周回遅れで日本の小泉政権にも反映されました。

小泉政権を始めとする従米保守政権が揃って「構造改革」「小さな政府」「官から民へ」「市場原理主義」を主張し、それに沿う政策を進めたのは、アングロサクソンを支配する故国喪失者がグローバリズムを進めるため、個人主義・新自由主義を彼らに強いたからです。結果、日本は政治だけでなく、経済的にも大きく毀損されました。

反して本邦の進化学者で「棲み分け理論」を主唱する今西錦司博士は、生物の社会について述べます。

「社会もまた、非常に保守的な、現状維持ということ

現れたのは、そういう冷戦下においてでした。つまり、「革新」に対する政治的対立用語として受動的に持ち出されたのであり、その「保守」に積極的な意義はありませんでした。

対して日本的保守とは欧米列強に対し民族的独立を守る、生得的なナショナルな感情を持つものです。従米保守は保守を生得的なものと考えず保守主義を唱え、その始祖を自由主義と共にアングロサクソンに求め、ナショナルな感情に否定的です。

日本の政治的アパシーと混乱は、保守の再定義が失敗に終わったことに象徴されるように、日本的保守と従米保守という二つの「保守」が混同されていることにあります。国民が政治に生得的な「保守」を求めているにも関わらず、この二つの保守を名乗る勢力の差異が明確化出来ていないのです。

現政権の新自由主義的、従米的政策への賛意が低いにも関わらず内閣支持率が下がらないというアンビバレンツな状況は、国民から自民党への日本的保守としての期待があるからではないでしょうか。

日本的保守と従米保守の根本的な違いは他国へ追従があるか否か、つまりナショナルな感情の有無です。従米保守が近年新自由主義を掲げる所以は、アングロサクソ

を大事にしている。そうでなかったら、この世界（社会）が混沌になるわけです」と。

同様に評論家の福田恒存氏も「保守的な態度というものはあっても、保守主義などというものはありえない」「保守派はその態度によって人を納得させるべきであって、イデオロギーによって承服させるべきではないし、またそんなことは出来ぬはずである」と述べています。

「現状を維持する」「急激な変化を好まない」というのは人間を含めた生物の生存の為の本能であり、ことに社会的動物である人間にとっては社会の維持に必要な、すべての人間に備わっている「態度」であり、決して格別なことではないのです。

「保守」というものが、イデオロギーではなく、人間本来の生得的なもの、という生物社会的観点から見れば、アングロサクソンの個人を始祖とせずとも日本にはナショナルな感情を持つ日本の保守が、本来的に存在していたはずであり、それは現代にも通ずるものなのです。「尊王攘夷」は決して古い概念ではないのです。

「親米反共」新自由主義」としての従米保守

大東亜戦争後、世界は米ソ冷戦構造の只中にありました。「保守」という言葉が、自覚的に日本の政治の場に

ンを支配しグローバリズムを進める勢力がそれを求めるからです。これら追従・売国者は、日本が中国の冊封国になれば従米保守から直ちに媚中保守（民主党の中国語での様な）になるでしょう。

しかし、現在保守的と目される政党、団体に入り込んだ従米保守の峻別は容易なことではありません。

最近、ある論に「日英同盟を脱して日本は零落した。今度こそ就く側を間違えるな。米中冷戦だ。日米同盟を堅持せよ。アメリカと共に戦うことで日本を認めさせるのだ」とありました。

かりそめにも独立国同士で締結した日英同盟と「アメリカが世界である」ことを強制するために行われた日米同盟を同列に扱うことが出来ないのは自明の理です。また、米中のあいだにかつての米ソと同様の冷戦があるという見解も果たしてそうでしょうか。アングロサクソン系諸国、特にアメリカは伝統的に親中国・容共であり、尚且つ経済的結びつきが強い現代においてアメリカが中国と戦火を交えることはありません。またアジアの覇権を握る可能性がある国家は、むしろ日本であり、それを好まないのがアメリカなのです。

似たような論は日本のグローバル企業系のシンクタンクでも良く聞かれています。それらの論は、いずれも他

国への追従・売国者であることを明かすものではないでしょう。日米同盟「ビンの蓋」論等は東アジアの安定をもたらすものではなく、事実は日本を徹底して封じ込める戦略であり、金輪際、日本に自衛出来る戦力を与えらるつもりはないのです。

保守的勢力に紛れた従米保守は①⑤の点でアングロサクソン・アメリカへの追従が明らかになるのではないのでしょうか。

①日米同盟の強烈な支持者であること（日本が自主防衛出来ない論）

②日本が貿易立国であるかのような錯誤へ誘導すること（グローバルイズムへの支持、構造改革論者、市場開放論者）

③決してアングロサクソンへの疑義を述べないこと（アングロサクソン同盟論。保守思想をアングロサクソンへ求める。ナシヨナリズムの否定）

④イスラム社会への敵対に疑義を持たないこと（テロへの戦いの参加表明等）

⑤アメリカ、中国、二国の通底を認めないこと（米中冷戦論）

私は思います。何故ナシヨナリズムが忌避され、パトリオティズムなら良いのでしょうか。私は国際社会にお

はアメリカのプラグマティズムへの返礼であったのだと思います。あの時代において祖国の敗北を承知しながら、故郷の父母、弟妹、自分が知る人々のために犠牲を自らに強いた、その行為は我々日本人の精神に永遠に不可侵な領域を造りました。

その証左にその清冽な行為は他民族からも畏敬の念を払われているのです。

我々日本人がこのまま他国へ隸属することを私は断固として是認できません。そのために私は日本的保守が、従米保守を排し、アングロサクソンへ対峙をする理念として「日本主義」を掲げます。

「日本主義」とは神道の自然観、武士道の倫理観という共生の思想を持つ日本独自の伝統に鑑み「一君万民」「君民一体」そして「独立割拠」を体現する精神です。

いてナシヨナルな感情を持ちえない国家・国民は亡国・流浪の民となってしまう運命にあると思います。既に彼ら他国追従者は、いや元より故国喪失者なのでしょう。

日本的保守から日本主義へ

これまで縷々述べて来ましたが、今改めて日本的保守が他国追従の従米保守に呑みこまれ、政局において敗北したことが本当に残念で悔しくてなりません。何度も述べますが、その敗北は、日本的保守と従米保守の区別が、政治的妥協の末にあいまいに成されなかったことが現因なのです。

ナシヨナルな感情の肯定と否定、祖国への忠誠は現代だけの問題でなく、おそらくは大東亜戦争においても勝敗を分ける要因の一つであったろうと思います。

如何に従米保守が国家・国民に対して美辞麗句を並べても、所詮、米中のどちらに就くか、といった程度の故国喪失者の論でしかありません。祖国防衛のために列強と戦い、散った英霊と我が身を捨てて国民を救った昭和天皇が、私たち日本人を生かし、それが今に繋がる大切さを知る日本の保守とは、その真摯さにおいて歴然たる違いがあると思います。

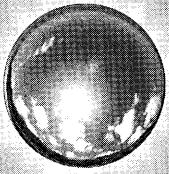
特にあの一つの英雄劇である特別攻撃隊の英霊の行為

優劣劣敗という理だけを信じ、共生の思想を否定する従米保守の個人主義・新自由主義、他国への追従・隸属では世界の混乱と荒廃を救うことは出来ません。我々は一日も早く従米保守から決別しなくてはならないのです。

この多極構造化し、新自由主義による経済破綻、環境破壊による資源の枯渇、途上国の人口爆発が予想される世界で、日本は、国家を成立させる「エネルギー」、「食糧」、「防衛」の三要素の安全保障を早急に構築せねばなりません。

それには他国追従では埒があかないのです。我々は「日本主義」掲げ、日本を日本として取り戻さなければならぬのです。

日本敗れず。日本こそ道義国家として世界に安寧をもたらす役割を果たせる国なのだ信じて止みません。



公共施設や一般企業、ご家庭で発生する鉄や非鉄スクラップ等のリサイクル事業を通して、社会の皆様にも、明日の地球に、貢献してまいります。

株式会社
ブルーアース東京
千葉県印西市平賀2215-1
TEL.0476-98-2083